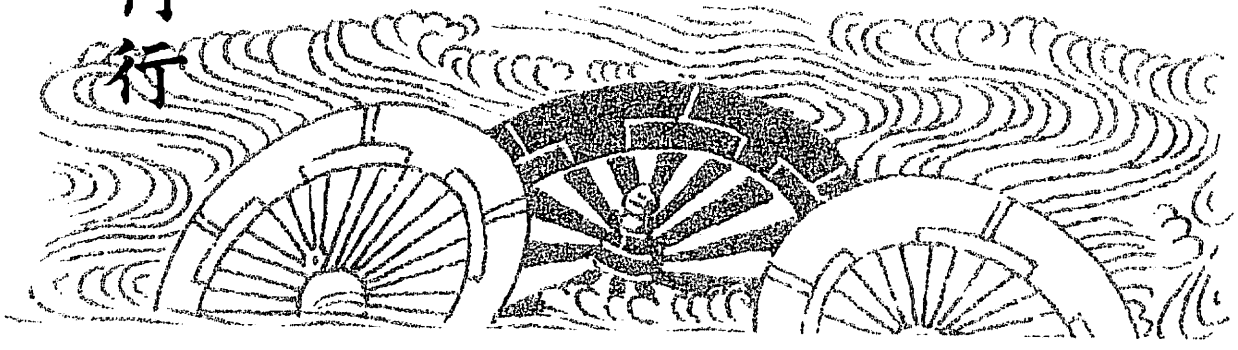
新日本古典文学大系 45

平家物語 下

梶原正昭
山下宏明 校注

岩波書店刊行

1993



後藤兵衛は、いきながき究竟の馬には乗ッたりけり、そこをば、なッくにげのびて、後に熊野法師、尾中の法橋をたのんでゐたりけるが、法橋死ンで後、後家の尼公訴訟のために京へのぼりたりけるに、盛長ともしてのぼッたりければ、三位中将のめのと子にて、上下にはおほく見知られたり。「あなむざんの盛長や。さしも不便にしたまひしに、所でいかにもならずして、思ひもかけぬ尼公のともしたるにくさよ」とて、つまはじきをしければ、盛長もさすがはづかしげにて、扇をかほにかざしけるとぞ聞えし。

敦盛最期

いくさやぶれにければ、熊谷次郎直実、「平家の君達、たすけ舟に乗らんと汀の方へぞ落ちたまふらむ。あッぱれよからう大将軍にくまばや」とて、磯の方へあゆまするところに、ねりぬきに鶴ぬうたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形うッたる甲の緒しめ、こがねづくりの太刀をはき、切斑の矢負ひ、しげどうの弓持ッて、連銭葦毛なる馬に黄覆輪の鞍置いて乗ッたる武者一騎、沖なる舟に目をかけて、海へざッとうちいれ、五六段ばかりおよがせたるを、熊谷、「あれは大将軍とこそ見まいらせ候へ。まさなうも敵にうしろを見せさせたまふものかな。かへさせ給へ」と、扇をあげてまねきければ、招かれて、とッてかへす。汀にうちあがらんとするところに、おし並べてむずとくんでどうど落ち、とッておさへて頸をかゝんと甲をおしあふのけて見げれば、年十六七ばかりなるが、うす化粧して、かねぐろ也。我子の小次郎がよはひ程にて、容顔まことに美麗也ければ、いづくに刀を立べしともおぼえず。「抑いかなる人にてまし〳〵候ぞ。名のらせ給へ、たすけまいらせん」と申せば、「汝はたそ」とぞ給ふ。「物、そのもので候はねども、武蔵国住人、熊谷次郎直実」となのり申。「さては、なんぢにあふては、なのるまじひぞ。なんぢがためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸をとッて人にとへ。見知らふずるぞ」とぞのたまひける。熊谷、「あッぱれ大将軍や。此人一人討ちたてまッたり共、まくべきいくさに勝べきやうもなし。又討ちたてまつらずとも、勝べきいくさにまくる事もよもあらじ。小二郎がうす手負たるをだに、直実は心ぐるしうこそ思ふに、此殿の父、討たれぬと聞ひて、いかばかなげき給はんずらん。あはれたすけたてまつらばや」と思ひて、うしろをきッと見げれば、土肥・梶原五十騎ばかりでつゞ

後藤、人々に憎まれる

一 疾駆しても息がつづくこの上もなく駿足の馬。 二 たやすく逃げのびて。「なッく」は、思いのほか速く、あるいはたやすいさまをいう語。 三 紀州の熊野三山に奉仕する僧徒。 四 熊野別当家の一族であろうが未詳。法橋は法印・法眼につぐ僧位。 五 ああ何たる恥知らずの盛長よ。 六 重衡があれほど可愛がっておられたのに。「不便にす」は、可愛がること。 七 一緒に死なずに。同じ場所でともに命を捨てようとせずに、の意。 八 われわれの予想すらしなかった。 九 心にかなわぬことや、嫌悪し排斥する時などに、爪先を親指の腹にあててはじくこと。人を軽蔑し非難するしぐさ。 一〇 一諸本。

熊谷、敦盛を討つ

一一 平家が一ノ谷の戦いに敗北したので。→諸本。 一二 ああ、立派な大将と対戦したいことよ。身分のあるよい敵を討ちとることによって手柄を立てようと期待したのである。 一三 「ねりぬき(練貫)」は、生糸を縦糸、練糸を横糸にして織った高級な絹織物。練糸は、生糸をわら灰の汁の中に入れて釜で煮、外皮の膠質(セリシン)をとり去ったもので、オパールのような やわらかい光沢をもつ。その練貫の布地に鶴の模様を刺繍した豪華絢爛たる鎧直垂。着用しているつわものの高貴な身分や、風雅な人柄がうかがえる。 一四 袖や草摺の上部を萌黄色(黄と青の中間色)で濃く染め、下に行くにつれて次第にうすくなるように配色して綴った鎧。 一五 鍬(またはくわいとも)の形をした金属製の飾りを眉庇の上につけた冑。 一六 鞘や柄などの金具を黄金で飾った立派な太刀。 一七 鷲や鵰の羽の黒白の斑文が鮮やかなものではいだ矢。 一八 弓の幹に籐蔓を幅一寸五分間隔に繋く巻いたもの。 一九 葦毛に、穴あき銭を並べたような灰色の丸い斑文がある馬。 二〇 鞍の前後の山形になっているところを金で縁どった高級な鞍。 二一 「段」は長さや距離をはかる単位。中世では、一段を二・七㍍とするので、約一三一・六㍍ほどの距離。 二二 そこにいかれるのは。 二三 「まさなくも」の音便形。見苦しくも。卑怯にも。 二四 よみは正節本による。 二五 お歯黒で歯を黒く染めているさま。当時、貴族は元服すると歯を染めるのがならわしであった。 二六 物の数に入る程どの者ではありませんが。人並みに数えられるほどの者ではないと、自分の身分の低さを謙遜して言ったもの。 二七 「さては」は、熊谷が名のったその身分に対していう。お前がそういう身分の者であるならば、の意。「まじい」は「まじき」の音便形。お前に向かっては名のるまいぞ。直実の身分を知り、対等に名乗り合うべき相手ではないと判断したための語。 二八 お前にとってはよい敵であるぞ。自分には不足だが、直実の側からは功名手柄を立てるにふさわしい立派な相手であるの意。 二九 「見知らんずるぞ」の音便形。見知っているに違いないぞ。 三〇 ああ何と立派な大将であられることよ。相手の誇り高い堂々とした受け答えに感嘆した、称賛の言葉である。 三一 軽傷。小次郎直家の負傷のことは、巻九「一ノ谷之懸」参照。 三二 「心ぐるしくこそ」の音便形。 三三 すばやくさっと見たところが。 三四 土肥次郎実平と梶原平三景時。ともにこの戦いには、大将範頼・義経を補佐する軍監として参陣していた。直実が敵の君達をたすけようとした時に、その場に現れたのが、軍監の土肥・梶原であったとしていることに留意すべきであろう。

ひたり。熊谷、涙をおさへて申けるは、「たすけまいらせんとは存候へども、御方の軍兵、雲霞のごとく候。よものがれさせ給はじ。人手にかけまいらせんより、同くは、直実が手にかけまいらせて、後の御孝養をこそ仕候はめ」と申ければ、「たゞとく〳〵頸をとれ」とぞのたまひける。熊谷、あまりにいとをしくて、いづくに刀をたつべしともおぼえず、目もくれ心も消えはてて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば、なく〳〵頸をぞかいてゞげる。「あはれ、弓矢とる身ほど口惜かりけるものはなし。武芸の家に生れずは、何とてかゝる憂き目をば見るべき。なさけなうも討ちたてまつるものかな」とかきくどき、袖をかほにをしあてて、さめ〴〵とぞなきゐたる。良久しうあッて、さてもあるべきならねば、よろい直垂をとッて、頸をつゝまんとしけるに、錦袋にいれたる笛をぞ、腰にさゝれたる。「あないとおし、この暁、城のうちにて管絃し給ひつるは、此人〻にておはしけり。当時みかたに、東国の勢なん方騎かあるらめども、いくさの陣へ笛持つ人はよもあらじ。上臈は、猶もやさしかりけり」とて、九郎御曹司の見参に入たりければ、これを見る人、涙を流さずといふ事なし。

後に聞けば、修理大夫経盛の子息に大夫篤盛とて、生年十七にぞなられける。

一雲や霞が立ちこめるように密集しております。二あなたはとうてい逃げられますまい。元和版は、「よものがし参らせ候はじ」とする。これならば、味方の軍兵がよもやお逃しすまいの意となる。三死後の御供養。「孝養」は、死者の冥福を祈って仏事を行うこと。四→諸本。五ふびんで、かわいそうで。六目の前が真っ暗になり、精神がもうろうとなって。七前も後もわからないことで、ものの分別がつかないこと。呆然自失のさま。八「さてある(そのままでいる)事もできないので」に、強意の「しも」が挿入された形。人がどう望んでも状況がそれを許さず、結局その運命に従わざるを得ない場合に用いられる常套句。九「掻きてける」の音便形。掻いてしまった。一〇くどくどと恨み言をいうこと。一一だいぶ時間がたってから。一二鎧直垂を切りとって。身分ある者の首をとった時は、その相手に対する敬意と、よい敵を討ったことの証拠を示す意味もあって、その敵の着用している鎧直垂を切りとり、それで首を包むのがしきたりとされた。一三「管絃」は、音楽の演奏。熊谷が一ノ谷の先陣を志したとき、城砦の中から管絃の音が聞えたことへの言及は本文にはなく、盛衰記だけがこれを述べている。一四ただいま、現在。一五本来は仏教語で、夏安居(ひと夏雨季の九十日間、僧が一室に籠って修業をすること)の年功を多く積んだ高僧のことをいうが、転じて身分の高い貴人の意。一六やはり風雅なものだ。「やさし」は、優美で風雅な心をもっているさま。一七→諸本。一八清盛の異母弟。敦盛(篤盛)はその子で、経正・経俊の弟。一九→諸本。

敦盛と笛

二〇熊谷の出家人道の希望は一段と強くなった。「発心」は「発菩提心」の略。出家への思いをいう。二一例の笛。二二第七十四代の天皇。二三父祖から代々うけ伝えて来られたのを。二四ものの用に立つべき才器や徳量があること。ここでは、笛を吹きこなす技量をいう。二五白氏文集、香山寺洛中集記」の「願以一世俗文字之業、狂言綺語之過、転為三将来世世讃仏乗転法輪之縁」という一節による。「狂言」は、真実をねじ曲げたいつわりの言葉。「綺語」は、美しく飾り立てた実のない言葉。ともに仏の教えを損ない、人々の心を惑わすものとして慎むべきこととされた。音楽もその一つ。二六仏道を讃仰し、人を悟りの境地に導く機縁。狂言綺語も、仏法をたたえ人を信心に導く機縁となるならば、その意義があるとされた。二七→諸本。二八教盛の子、業盛。二九業盛を討ったのは延慶本では比気、長門本では菅屋、斯道本では泥屋。比気(比企)は武蔵国の住人、土屋は桓武平氏で相模国大住郡土屋の住人なので、ここは長門本・斯道本の「ひぢや」が正しいか。三〇河越小太郎重房の配下の軍勢に包囲されて。重房は、河越太郎重頼の子。秩父氏の一門で、武蔵国入間郡河越に住んだ。

業盛ら討死

三一平清盛の七男(八男とも)。清定は清貞で、中原師元の子で清盛の養子になった。三二敵の首をたくさん取って。敵を数多く討ち取って。「分捕」は、分捕首の意。三三戦場から逃げ去って、いなくなり。三四中務省で出納・監察・管理を扱った職を監物といい、この職にあった者が姓とした。頼方は武藤氏かというが未詳。三五児玉党は、武将が戦陣で采配の代りに用いる軍配団扇を家紋としていたが、その軍配団扇の紋章を描いた旗。

知章、父の身代りに

知章最期

それよりしてこそ熊谷が発心の思ひはすゝみけれ。件の笛は、おほぢ忠盛笛の上手にて、鳥羽院より給はられたりけるとぞ聞えし。経盛相伝せられたりしを、篤盛器量たるによッて持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申ける。狂言綺語のことはりと言ひながら、遂に讃仏乗の因となるこそ哀なれ。

門脇中納言教盛卿の末子、蔵人大夫成盛は、常陸国住人土屋五郎重行にくんで討たれ給ひぬ。修理大夫経盛の嫡子、皇后宮亮経正は、たすけ舟に乗らんと汀の方へ落給ひけるが、河越小太郎重房が手に取籠られて討たれ給ひぬ。若狭守経俊・淡路守清房・尾張守清定、三騎つれてかたきのなかへかけ入、さん〴〵にたゝかひ、分捕あまたして、所で討死してゞげり。

新中納言知盛卿は、生田森大将軍にておはしけるが、其勢みな落失せて、今は御子武蔵守知明、侍に監物太郎頼方、たゞ主従三騎になッて、たすけ舟に乗らんと汀のかたへ落たまふ。こゝに児玉党とおぼしくて、うちわの旗さいた